

# 多摩デポ通信 第14号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2010年5月6日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail [depo\\_tama@yahoo.co.jp](mailto:depo_tama@yahoo.co.jp)

## 3年目を迎えた責任

理事長 座間 直壯

いよいよ3年目を迎える多摩デポ。都立図書館改革問題に始まり、多摩地区の図書館の現状から資料保存の深刻さに直面し、市民レベルでの図書館支援を模索してきました。

今回の総会の記念講演をお引き受けいただいた竹内哲氏の訳された「図書館のめざすもの」(日本図書館協会)の序文に、以下のような印象的な一節があります。

「……十七人の館界のリーダーを訪ね、(略)そこで強く印象づけられたのは、彼らが民主主義という時間と忍耐と経費とを要することに図書館員として真剣にかかわっていること、社会の変転と利用者の要求の変化に応じて図書館の方針を立て、サービスを展開する柔軟な姿勢をとること、そして、逆境に負けない強靱な考え方を持ち続けていることとであった。二時間にわたって予算削減によるサービス縮小の苦境を語った後、『二、三年したらもう一度来てほしい。私たちは決して今の状態に止まっていな

## 2010年度定期総会に集まろう!

—NPO 多摩デポ3年目に突入

日時：5月30日(日)午後2時～4時30分

会場：国分寺労政会館第二会議室

JR 国分寺駅南口5分 旧勤労福祉会館 電話：042-323-8515

記念講演：竹内 哲 (さとる) 氏

(前日本図書館協会理事長・元図書館情報大学副学長)

演題：「図書館のこと、保存のこと

～図書館の歩む道～」

(講演だけの参加可・無料)

- 13:30 開場、受付開始
- 14:00～15:00 定期総会
- 15:00～15:10 休憩
- 15:10～16:30 記念講演および質疑
- 17:00～19:00 場を移し懇親会

いから』と結んだ女性館長の言葉に、目が覚めるような思いをしたのを今も忘れることができない。」とあるのです。

私たち多摩デポとて同じ気持ちで、様々な問題に立ち向かい、乗り越え、前進していく責任があると思います。

市民による市民のための図書館づくりを目指し、忍耐強く取り組んでいかなければなりません。今年は三年目という節目の年であります。会員が一丸となつて「共同保存図書館・多摩」の実現に向けて少しでも近づける努力をしていきたいと考えています。

皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 日野市立図書館での 横断検索ボランティア

### 作業終了

昨年度、日野市立図書館が資料の廃棄作業を行うにあたり、多摩地域最後の二冊に該当する資料は自館の責任において保存をしていくことを明確に打ち出され、多摩デポに重複調査横断検索の協力依頼をされました。理事会で検討の結果できる範囲で協力することになり、ボランティアとして応募くださった会員の方や協力者のご協力で取り組んだことは通信第12号でも既に報告したところです。

当初はデポとしての作業量の見通しも定かではなく、どの程度協力できるか不安も抱えながらのスタートでしたが、日野市立図書館が緊急雇用事業として職員を採用し横断検索にも精力的

に取り組んだこともあり、三万件以上の対象のうち多摩デポとしての検索件数は約六、八〇〇件余りで終了しました。

応募ボランティアは十六名、9月末の検索開始から11月末まで二回にわたって作業実施、のべ三三人実働十八名の参加でした。

初めての方でも参加できるように、事務局で横断検索マニュアルを作成しましたが、作業の中で色々な工夫が加えられ、データの切り分けやとりまとめ方法などでも貴重な経験となりました。一人一回分の検索件数、締切り日の設定など実際にやってみて妥当な範囲がわかってきました。

これらはきちんと整理し、ノウハウを公開するなど今後に活かしたいと考えています。多摩デポとして、さらに効率的な方法を提案することや、ボランティア参

加者をもっと増やすことも課題です。

今回調べて明らかになった日野市以外は一自治体所蔵となる資料がきちんと保存されていくかは今のところ不確定です。他の自治体でもこのような取り組みが今後なされることを願うと同時に、全体として「多摩地域最後の二冊は保存していく」ということが可能になるよう側面から応援したいと考えています。

作業をしながら感じたのは、「地域の図書館で保存したいもの」と「多摩地域最後の二冊」とはかなり違うということ。ぎりぎりの書庫状態の中で、何を廃棄し何を保存するかは、多くの図書館員が頭を悩ませる問題です。「共同保存図書館」の必要性を改めて強く感じました。

(事務局)

## 第7回多摩デポ講座

### 報告

3月12日国分寺市労政会館で、「国民読書年をきっかけにみんなで図書館や本のことを考えよう」と題し、清田義昭氏（出版ニュース社代表）による、初めて夜の多摩デポ講座が開かれました。

今年「国民読書年」ということになっているのだけれど、それはどういうことだろう？ 図書館関係者としてどう受け止めて動いていけばよいのだろうか？ 戸惑っている方も多いと思います。26人の参加者でしたが、学校図書館関係者や市民など、会員外の方も多くおいでになり盛会でした。終わった後、金曜日の夜の懇親会は遅くまでおおいに盛り上がりました。

初参加のおひとりに感想

を書いていただきました。



### 清田義昭氏の デポ講座に参加して

荒井 寿恵

3月12日に国分寺市労政会館で開かれた清田義昭氏の講演会に参加しました。直前の3月1日の毎日新聞朝刊に「国民読書年に読書環境の整備を、学校司書の制

度化から」との清田さんの意見が載り、学校司書間のMLで感嘆と共に情報が流れていたからです。

「国民読書年をきっかけにみんなで図書館や本のことを考えよう」と題して、まず、出版界の過去から現在に至るまでを資料も交えてたどった上で、雑誌不況、出版界の再編問題、デジタル化現象、電子書籍端末など、今起きていることを整理してくださいました。

次に「じゃあ、読もう。」がキャッチフレーズの「国民読書年」に具体的行動として何が必要かを提起され、読書バリアフリー化などの運動などのほか、書誌データ一元化問題がクローズアップされていること、背景には図書館予算の減少があることを説明されました。

ここで時間となり、あれ？ 本当に伺いたかったのは、その先のお話ではなか

ったかと少し残念にも思いました。でも、学校司書の制度化は百年したらなどと言っている場合ではない、何が有効かを考えて前へと励まされるお話でした。

「じゃあ、読もう。」の前に来るのは「司書がすすめるから」というフレーズしか思いつきません。「子ども読書運動は、大人が深く読み込むことなのだ」という先人の言葉を噛みしめ、真の意味で本を手渡せる「本屋さんの回し者」になりたいと思います。

### 図書館創設二代 財団法人山田文庫訪問記

副理事長 平山恵三

JR高崎駅の北西にある交差点「本町一」もとまちから西に四百メートルほど進むと「常盤町」の交差点がある。

高崎宿を出る旧中山道はここを右折して軽井沢のほうへ下っていたらしい。この交差点の東北の角地に山田文庫の図書館がある。写真は、図書館になってい建物と南の庭である。

4月28日の訪問に際し、長時間お相手くださった関恒雄事務局長さんと高崎経済大学名誉教授高階勇輔さん、それから館の方にもずいぶんお礼を申し上げたい。

財団は、山田勝次郎・とくご夫妻の私財をもとに一九七四年に創立された。図書館の敷地と建物もご夫妻の住居であった。財団の事業は、県内小・中・高校の図書等購入への助成と財団所有図書による図書館運営の二本建てである。

最近までの助成実績は二九二校に累計六千三七万円余といわれる。

二〇〇五年刊の『山田文庫三十年の歩み』に、図書

の納品を続けた書店主からの寄稿があり、「学校の図書購入年間予算が、山田文庫からの寄贈図書代金より少ない、という校長先生のお話もありました」ともある。

『歩み』には、また、本格的な図書館活動を始めた一九九一年からのボランティアさんがたの一言集があり、読むと、「心安らぎ落着いた雰囲気魅了されて八年が過ぎ」た人あり、「来館者には教えられる事ばかり」と言われる人ありで、緑陰図書館の日ごろのたまたまが察せられる。

蔵書はおよそ五万点で、一部は他所に保管されているとのことであった。

山田勝次郎氏は、酒造家蠟山政次郎氏の次男で、農業経済学者と高崎倉庫株式会社社長の経歴を持った人、一九八二年に他界（享年八四歳）。とく氏は、先の大戦時まで高崎倉庫と上信電鉄

の代表で高崎商工会議所会頭が長かった山田昌吉氏の長女で、日ソ親善の経歴をもち、夫君のあと高崎倉庫社長を継いだ人、一九九〇年に他界（享年八八歳）。



ところで、夫妻の先代の蠟山氏と山田昌吉氏は、明

治後半期の高崎実業界の青年の間に生まれた「同気茶話会」の中心的な人たちのうちの二人。その茶話会またはそのうち二二名がほぼ最初に取り組んだ活動が図書館の建設だった。高崎教育会の私立図書館は一九一〇年に創設されたが、一九一九年には教育会がこの図書館を市に寄付したので、これが市立となった。現・高崎市立図書館は、私立時代からの通算ならば、今年がちょうど百年である。

なお、茶話会の会員は、周囲の賛同と協力を得て、創設後四年目の図書館で信用組合（現・高崎信用金庫の前身）をつくり、開業している。

財団には、明治、大正、昭和の高崎の実業や経済団体などの、ルーツならではの一次資料もあり、訪問時、約七百点のリストを拝見することができた。他日、一

部拝見の機会を得たいと思  
っている。

## 多摩デポブックレット③

### 『地図・場所・記憶』

―地域資料としての  
地図をめぐって―

第2回多摩デポ講座「昔  
の地図を編集し、土地の歴  
史を読む」は、「場所と記憶」  
(Topographic memory)をテ  
ーマに出版社(株)之潮をお  
こし綿密で詳細な検証作業  
を伴う出版物を出し続けて  
いる芳賀啓氏の講演でした。  
当日のお話は国分寺駅周  
辺のフィールドワークも含  
む盛り沢山の内容でしたが、  
ブックレットでは、地域資  
料としての地図―特に地形  
図―の持つ意味を中心にま  
とめていただきました。  
「地図」、「地形図」、「古  
地図」、「旧版地図」、それぞ  
れ概念を改めて確認する

のにもピッタリの小冊子と  
なっています。

発行日は5月30日。つま  
り総会参加者には当日配布、  
欠席の会員には郵送します。  
ブックレットは第1号  
『公共図書館と協力保存』、  
第2号『地域資料の収集と  
保存』とも好評発売中。

### アサヒタウンズ廃刊と

#### 残された資料のこと

事務局 田中ヒロ

「アサヒタウンズ廃刊の  
お知らせ」が同紙に載った  
のは2月25日号、日頃貴重  
な情報源として慣れ親しん  
できた人たちに衝撃が走っ  
たと言っても過言ではない  
でしょう。翌週からの紙面  
には廃刊を惜しむ声があふ  
れました。同社では廃刊に  
あたり、これまで集まっ  
てきた資料を多摩地域の図書  
館に声をかけて引き取り先

を探している、という話も  
伝わってきました。こうし  
た資料の行方も知りたく、  
またもし残っている資料が  
あれば何かお手伝いができ  
るかもしれないと、山田優  
子記者にお話を伺いました。

昨今の市民の新聞離れな  
ど本体の業績悪化のあおり  
での廃刊決定は社員にとっ  
ても突然のことだったよう  
です。この多摩の地に根ざ  
し、他に類のない地域新聞  
としてがんばってこられた  
だけに、その心中は察する  
に余りありません。

新聞を3月25日号まで発  
行し、また残務整理にも忙  
しい中、集まった資料の行  
く末にまで思いをはせる方  
がおられたことに、とても  
心動かされました。会社と  
してはそのまま処分、とい  
う流れもあった中で、山田  
記者はこのまま捨てるわけ  
にはいかない、とその仕事  
を買って出られたのだそう

です。四年前、立川の駅ビ  
ルから現在のところ引つ  
越した際にかなり整理した  
のでそう多くはなかったと  
は言うものの、リストは、  
各市の市史類を中心に百五  
十タイトル、二〇二冊に及  
んでいきます。資料の当該自  
治体を初め、引き取って  
れそうな図書館に電話をし、  
FAX番号を教えてもら  
うところから始め、色々苦  
労なされたようですが、四  
月末にお伺いした時点では  
ほぼ全点引取り済みとのこ  
とでホッとしました。

1972年の創刊以来三  
七年間、記者として多摩地  
域を駆けめぐってこられた  
山田記者の熱い思いと経験  
は短時間で語りつくせるも  
のではなく、次回の多摩デ  
ポ講座として、ぜひみなさ  
んにお話していただきたい  
と準備を進めています。ど  
うぞご期待ください。

## 第四回多摩地域公立図書館大会が開かる、理事長参加の「資料保存と共同利用」分科会報告

東京都市町村立図書館長協議会主催「多摩地域公立図書館大会」が開催された。基調講演と五分科会で参加者はのべ七十三人。

2月4日午後の第1分科会「資料保存と共同利用」では、当NPOの座間理事が発表者として出席した。午前には津野海太郎理事が「デジタルとケータイの時代の『読書』」の題で基調講演をした。講演もどの分科会も多摩の図書館にとつては最新の課題・話題が出されてきたが、ここでは第一分科会について紹介する。

まず、都立中央図書館企画経営課樋渡えみ子氏が、「東京都立図書館での検討の現状」の題で話された。

都立がこの問題で市町村の設定した公開の場に出席されたのは画期的。次に西東京市立図書館の中川恭一氏が「この間の多摩地区図書館の取り組み」都立再活用資料共同整理・保存の取り組みと共同利用図書館構想」を語られた。次に日野市立図書館の鬼倉正敏氏が、「日野市立図書館の資料点検・保存事業」他市や都立の保存を視野に入れながら」を話された。最後に座間理事が「NPO法人『共同保存図書館・多摩』の活動」を話された。共同保存図書館を目指す活動の中で、特に「里親探し」事業の面白さ、その実践から見えてきた現状を紹介した。

この大会では、第一回で都立の再活用資料をまとめ、保存活用しよう、と提起した館長協議会の動きを背景にシンポジウムが開かれたほか、館長協議会で「共

同利用図書館」検討報告書が出来たことの発表、安江明夫氏の基調講演など毎回行われている。今回はその関係者が同じテーブルに着いた企画の意義があった。都立の発表が注目されたが、特に新情報はなかった。

実行委員会の労を評価しつつ、共同保存を実現する起動力につながる取り組みになれたかは、次の動き次第ではないでしょうか？

(事務局)

### 一五年、現場から離れていた元図書館員の感想

元福生市立図書館職員

戸室幸治

長く離れていました。事務局に乞われて一言の感想。第1分科会は私の一五年間のブランクによると思われませんが、都立の何が問題

で、それに対してどう考え、どう対応をとったのか。それしかなかった理由、これで展望が開けるか？等。個別には日野市の鬼倉さん報告「資料保存の経過」がありました。あの苦労とエネルギーを各市町村の図書館で今後本当に行うのか。住民と共にどうしたいのか。よく分かりませんでした。

私は今年すべての分科会に出てみました。都立図書館が参加しない中で市町村立図書館だけでこのような「図書館大会」を毎年継続して開催していることについては心から敬意を表したいと思います。その上で全体として図書館において何が現在問われ、職員側はどんな苦勞をし、住民に何を考えどんな行動をしてほしいかといったことを、もう少し深く掘り下げ論じ合えるよう改善して欲しいと思います。